

PAC分析を用いた母子画における描画体験の検討

高松優貴・石田 弓

Study of the drawing experience in “Mother and Child Drawings” using PAC Analysis

Yuki Takamatsu and Yumi Ishida

The drawing method is widely used in practical scenes of clinical psychology, and attention is being drawn to its therapeutic effects. This study conducted an interview survey using PAC analysis to demonstrate what type of drawing experience can be found in the drawing method, with a focus on “Mother and Child Drawings.” As a result, it was demonstrated that the narratives about the internal mother-child relationship of the person who draws, the actual mother-child relationship, the family relationship, or the values of the person who draws could be obtained through conducting Mother and Child Drawings. Also, as a factor due to which various narratives were obtained, it was observed that introspection could easily deepen using PAC analysis, which has a stage of free association. Based on the above, it was suggested that when conducting a Mother and Child Drawing in a practical scene of the clinical psychology, it is therapeutically useful for the person who draws to reflect on their drawing with the interviewer by means of PAC analysis.

キーワード : Mother and Child Drawings, PAC Analysis, The drawing experience

問題と目的

描画法とは

描画法とは描画を用いて人格を知ろうとするもので、人格測定法のなかでは投射法に分類される(青木, 1979)。心理臨床の現場では、描画法が頻繁に用いられている(小川・Chris, 1992)。描画法は、主に言葉では表現されない心の内面や、パーソナリティの本質的な部分を理解したいとき、描き手が気づいていないパーソナリティの側面を知り援助したいとき等に、描画は実施される(高橋, 2008)。また、描画を描くこと自体が言語による防衛を突破してカタルシスに導くこともあり(伊集院, 2009)、治療効果も期待できると考えられる。藤中(2010)は、描画法において重要なのは、病態診断力や予測力ではなく、心理臨床行為を促進させる力が備わっていることであると述べている。以上のことから、描画体験自体の治療効果が、今後重要視されてくると思われる。

描画体験の治療効果

描画の過程にはカタルシス、洞察、自己実現など、心理療法において効果を持つ要因がはたらいっているといわれているが、描画による治療効果が表れるためには、描き手と面接者が描画行為の後に語り合うことが必要である(高橋, 2007)。この描画後の対話 (Post Drawing Dialogue) (高橋, 2007) に関連し、藤井 (2010) は描画法の一種である母子画を用いて面接法の検討を行った。具体的には、半構造化面接を実施し、自分が描いた母子画を見て自由連想を行う調査協力者と、自由連想を行わない調査協力者の気づきの有無について検討した。結果、描画を見ていない個人よりも、前者の方が、自身が気づいていなかった母親への思いに気づき、そこから自分の考えを深めることができていた。これは、自分の描いた母子画を眺めて吟味することによって、自己を改めて見つめなおしたり、自己の気づいていなかった側面に気づく契機となったからであると考えられる。また、古川 (2010) は、クライアントが自分で描いた風景構成画を振り返ることで、自身の変化の肯定的側面や、自己の否定的側面に気づいたことを報告している。

以上より、描画を振り返るという体験そのものに描き手の気づきを促す治療効果があることが示唆されるが、描画法はこれまでに数多く開発されている (名島・杉本・金子, 2004) ことを考えると、描画体験は描画法によって異なる可能性がある。そこで本研究では、人物画のひとつである母子画に焦点を当てる。

母子画 (Mother and Child Drawings)

母子画とは、Gillespie (1989) によって考案された描画法であり、描き手の自己認知や他者との関係様式、早期の母子関係などが反映されると考えられている (藤井, 2010)。そこでは、母親像と子ども像が内的世界の自己と対象を表象し、母親像と子ども像の交流が自己と対象の交流を象徴する。そして、それが投映されたものが現実の対人関係であると考えられている。つまり、母子画に表現された母親と子どもの関係性を読み取ることにより、描き手の対象関係を理解することが可能となるのである (馬場, 2005)。

わが国では、馬場 (2005) を中心に研究が進められてきており、母子画と愛着スタイル尺度や東大式エゴグラムといった質問紙との関連や、非行少年に実施した母子画の特徴や面接場面での母子画の使用法などについて、量的・質的研究の両方が行われている。しかし、母子画を描くという行為からどのような気づきが得られるのかという点について系統的に調査した研究は見当たらない。そこで、本研究では母子画を描くことでどのような体験が得られるのかという点に着目する。

母子関係の理論

Gillespie (1994 松下・石川訳 2001) は、母子画における背景理論として、対象関係論を挙げている。人生における最早期の関係は母子間にみられ、赤ん坊は誕生以前の 9 か月間に、母親とこの上なく親密な接触をするという体験を持ち、そのような接触が子どもにとって世界に出ていく出発点となるため、「母親」と言う概念は世界を理解する基礎として形成されていく (Gillespie, 1994)。母親のような世話するものから提供される機能は、子どもとの相互交流を通して、次第に内在化されていく (Grolnick, 1990 野中・渡辺訳 1999)。この過程において、Winnicott (1987 成田・根本訳 1993) は「抱えること (holding)」を重視し、赤ん坊は「抱っこ」されることで、「信頼の経験」に基づいて

外的な刺激を取り入れていくことができると考えた。Bion (1962 福本訳 1999) は、乳児が1人で処理しきれない感情体験を経験しているとき、付随している不必要で不適切な情緒や感情の部分を母親が受け止めて吸収し、乳児の受け止めやすい表現に置き換えて返していく能力を *reverie* 能力と名付けた。そうした関わりを受けた子どもは、その後の人生における経験を不安や恐怖で迎えるのではなく、「大丈夫だろう」という予感を支えにして受け入れることができるようになると考えられている。

PAC 分析について

描画の説明では、より意識的で状況依存的な描き手の心情が現れる可能性がある (近藤, 2012)。このことに関連し、藤中 (2008) は、カウンセラーとクライアントが会話をしながら描画を媒介として自己理解を進めていくためには、描画行動と日常行動を結びつけることが必要であると指摘している。しかし、描画中に体験したことを感じて言語化するためには、何らかのしかけが必要である (藤中, 2010)。そこで、本研究では PAC 分析に着目した。

PAC 分析とは、内藤 (2002) によって開発された「個」を科学する方法である。これを描画で用いる場合、描き手が自分で描いた描画を眺め、浮かんだイメージや言葉をカードに記述する。さらに、そのカード同士の相関を描き手自身に判断させたのち、クラスター分析を行い、クラスター名を描き手に付けさせる。PAC 分析は、バウムテストの振り返り体験を検討した研究 (藤中, 2010) で、その有用性が確認されており、描画行為中に感じていたことを再体験し、体験を探索することで明確化が容易になり、その結果、描画行動を日常行動に関連づけることが実現できる (藤中, 2010)。よって、本研究でも PAC 分析を用いることで、母子画の描画体験を明らかにすることができると考えられる。

本研究の目的

子どもが基本的なまとまりをもったパーソナリティを獲得するためには、母子間の「関係性」が子どもに対して適切に機能することが大切であることが指摘されている (川上, 2014)。また、重篤なネグレクトや虐待を受けた子どもは愛着障害となることもあり、愛着障害の子どもは嘔つき、泥棒、良心に欠けるなどの様々なネガティブな特徴を持つようになることが指摘されている (Prior & Galser, 2006 加藤訳 2008)。前述したように、描画体験そのものの治療効果が重要視されているため、母子画によって得られる気づきを明らかにすることは、母子関係に問題のあるクライアントの心理療法という観点から考えても有意義であると思われる。また、心理面接場面において母子関係は重要な視点のひとつであり、母子画を面接で実施する際のねらいとなる観点や心理療法として効果を持つ要素を見いだせば、母子画を心理臨床場面に適用する可能性が広がると考えられる。そこで本研究では、母子画を描くことでどのような体験が得られるのかについて探索的に検討することを目的とする。こうした研究は既に馬場 (2005) や藤井 (2010) によって行われてきたが、PAC 分析を用いて母子画の描画体験を検討したものは見当たらない。そこで、PAC 分析を用いることで、描き手の自己理解や気づきといった治療効果が見られるのかどうかについて検討する。

方 法

調査参加者・調査時期 参加者は A 大学の学生 24 名 (男性 6 名, 女性 18 名) とした。参加者の平均年齢は, 23.47 歳 ($SD=1.64$) であった。調査期間は平成 26 年 10 月~11 月であった。

調査材料 A4 のケント紙と 3B の鉛筆, 消しゴム, 自由連想記述表, 類似度評定表。

調査手続き 調査は 2 回に分けて行った。第 1 回目では, 母子画および PAC 分析で用いるデータの調査とした。まず, 参加者に母子画を描かせた。実施の際には, 紙を横向きに配布して行った。教示は Gillespie (1994) に従い, 「お母さんと子どもの絵を描いてください」とした。同時に, 調査内容に絵を描く技量は関係していないこと, 時間制限はないこと, 鉛筆と同時に配布した消しゴムはいくらでも使用してよいことを伝えた。

描画後に, PAC 分析を行った。具体的な手順としては, まず母子画を眺めながら浮かんでくる言葉や文章を自由連想記述表に記述させた。その後, 自由連想で浮かんできた言葉や文章を 1 つずつ比較し, それらがどの程度近いか, もしくは遠いかという点について参加者本人に評定させ, 自由連想語の類似度評定表を作成した。項目は「A とても似ている (近い)」~「G まったく似ていない (とても遠い)」の 7 件法とした。そして, 類似度評定表をもとにクラスター分析を行い, 自由連想語をグループにまとめた。

第 2 回目は面接調査とし, クラスター分析の結果と母子画を見せながら, 半構造化面接を行った。まずクラスター分析で抽出されたグループ 1 つ 1 つにグループ名をつけさせた。次に内藤 (2002) を参考に「(クラスター分析の) それぞれのグループについてどう思うか」, 「グループ同士を比較してどう思うか」, 「グループ全体を眺めてどう思うか」という 3 つの質問を行い, 必要に応じて補足質問を行って終了とした。

評定協力者・評定時期 評定協力者は A 大学大学院所属で臨床心理学を専攻する大学院生および, 研究生の 4 名 (男性 1 名, 女性 3 名) とした。平均年齢は 24.25 歳 ($SD =0.83$) であった。評定時期は, 平成 26 年 12 月であった。

評定項目 評定項目については, 全 16 項目であった (Table 1)。評定項目 1~5 に関しては藤井 (2010) を参考に考案した。評定項目 1 「理想の母子関係」は, 過去および現在の理想の母子関係が面接調査で語られた場合とし, 母子画に描かれた登場人物の理想および描き手自身の理想を含むこととした。評定項目 2 「思い出」は, 過去に起こった出来事や母子関係に関する語りであり, すべてが実際の出来事である必要はなく, 実際の出来事を元にした語りの場合も含むこととした。評定項目 3 「過去の母子関係に関する気づき」は, 過去に起こった出来事および母子関係に関して, 改めて気がついたことが語りに含まれるものとした。評定項目 4 「母親への思い」は, 現在および過去における母親に関する感情, もしくは母子画に描かれた母親に関連する感情および考えが語りに含まれているものとした。評定項目 5 「子どもへの思い」は, 現在および過去における子どもに関連する感情, もしくは母子画に描かれた子どもに関連した感情および考えが含まれているものとした。評定項目 6 および 7 は, 近 (2010) を参考に考案した。評定項目 6 「現在の母子関係」は, 描き手の現在の出来事および母子関係に関連する語りが含まれているものとした。評定項目 7 「現在の母子関係に関する気づき」は, 現在の出来事および母子関係に関して, 改めて気づいたことが語りに含

まれているものとした。評定項目 8「変化」は、原田・石田・内海 (2009) を参考に作成し、過去から現在にかけて変化したことが語りの中に含まれているものとした。評定項目 9「対立葛藤」は、久保 (2000) を参考に考案し、過去および現在のアンビバレントな感情や出来事が語りの中に含まれているものとした。評定項目 10～12 は Child Attachment Interview (CAI : Taget, Fonagy, & Shmueli-Goetz, 2003) を参考に作成した。評定項目 10「とらわれ」は、過去および現在の出来事にとらわれている様子で、怒りのみではなく、巻き込み型の誹謗中傷および侮蔑も含む語りが含まれるものとした。評定項目 11「理想化」は、過去および現在の母子関係に関して、根拠や裏づけのない『理想的な』親として話している内容を語りの中に含むものとした。評定項目 12「拒絶」は親への愛着、もしくは親と一緒にいることなどの愛着経験を否認している程度が強い語りを含むものとした。

さらに、評定を行う前に、本評定と同じ手続きで予備的な評定調査を行った結果、必要と判断された「13.母子のポジティブな関係性」、「14. 母子のネガティブな関係性」、「15. その他 (母子関係含む)」、「16. その他 (母子関係含まない)」を評定項目に加えた。

評定手続き まず面接調査データの逐語記録を作成した。その後、逐語記録を質問内容ごとにパラグラフに分け、評定資料を作成した。なお、パラグラフに分けたのは、評定をより行いやすくするためであった。次に、評定協力者に参加者の母子面体験の評定を行わせた。評定項目は、1つのパラグラフに対して複数数回答可とし、参加者の語りの内容が当てはまると感じるものを選ばせた。また、「15. その他 (母子関係含む)」、「16. その他 (母子関係含まない)」に関しては、評定者に自由記述でカテゴリー名を回答させた。

Table 1

母子面の語りに関する評定項目

1. 「理想の母子関係」
2. 「思い出」
3. 「過去の母子関係に関する気づき」
4. 「母親への思い」
5. 「子どもへの思い」
6. 「現在の母子関係」
7. 「現在の母子関係に関する気づき」
8. 「変化」
9. 「対立葛藤」
10. 「とらわれ」
11. 「理想化」
12. 「拒絶」
13. 「母子のポジティブな関係性」
14. 「母子のネガティブな関係性」
15. 「その他(母子関係含む)」
16. 「その他(母子関係含まない)」

結 果

まず、各参加者の語りの評定結果をもとに、代表値を算出した。具体的には、評定項目が選ばれた回数を合計するのではなく、1人の参加者の語りの中で、同じ評定項目が複数回選択されていた場合も1回として数えた。これは、参加者ごとにパラグラフ数が異なっているため、度数を算出するよりは、代表値としたほうが分析により適していると判断したためである。次に、選択率を算出した (Table 2)。選択率とは、各評定項目が、選ばれたすべての評定項目の中でどの程度選ばれたかという割合である。

以上の分析の結果、母子画についての語りとして多かった項目は、「1. 理想の母子関係」(10%)、「2. 思い出」(11%)、「4. 母親への思い」(11.8%)、「5. 子どもへの思い」(10.7%)、「13. 母子のポジティブな関係性」(14.0%)、「15. その他 (母子関係を含む)」(8.2%)、「16. その他 (母子関係を含まない)」(14.9%)であった。逆に、「8. 変化」(1.1%)、「10. とらわれ」(3%)、「11. 理想化」(1.3%)、「12. 拒絶」(1.8%)、「14. 母子のネガティブな関係性」(1.6%)は語られることが少なかった。以下に、「13. 母子のポジティブな関係性」および「12. 拒絶」に分類された参加者の母子画例を示した (Figure 1~2)。これらに関しては、ポジティブな母子関係に関する評定項目の中で最も選択率の高かったものが「13. 母子のポジティブな関係性」であり、ネガティブな母子関係に関する評定項目の中で最も選択率の高かったものが「12. 拒絶」であったため、代表例として適していると考えられたためである。

Table 2
各評定項目の選択率

評定項目	選択率(%)
1. 理想の母子関係	10.0
2. 思い出	11.1
3. 過去の母子関係に関する気づき	4.7
4. 母親への思い	11.8
5. 子どもへの思い	10.7
6. 現在の母子関係	3.1
7. 現在の母子関係に関する気づき	2.4
8. 変化	1.1
9. 対立葛藤	2.7
10. とらわれ	0.7
11. 理想化	1.3
12. 拒絶	1.8
13. 母子のポジティブな関係性	14.0
14. 母子のネガティブな関係性	1.6
15. その他 (母子関係を含む)	8.2
16. その他 (母子関係を含まない)	14.9
合計	100.0

評定項目「15. その他 (母子関係を含む)」で得られた評定者の自由記述内容をまとめた (Table 3)。『母子の感覚』は、抱き、抱かれた感触、「赤ちゃんが抱かれたときに感じる感覚」、「絵の中の母子の感覚」など、描かれた母子が感じている感覚を表現した語りが含まれるものとした。『家族関係に関する語り』は、「家族への思い」、「理想の家族像」、「親子に対するイメージ」など、母子関係も含んでいるが、母子以外の家族成員に関して言及がされている語りを含むものとした。『母子



Figure 1. 「13. 母子のポジティブな関係性」の母子画例

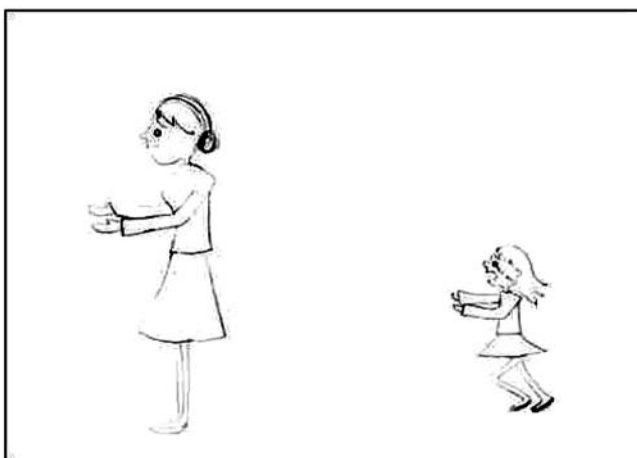


Figure 2. 「12. 拒絶」の母子画例

Table 3

評定項目「15. その他（母子関係を含む）」で得られた自由記述

母子の感覚	母子関係に関連したイメージ
「抱き、抱かれた感触」	「浮かんだ母子についてのイメージ」
「赤ちゃんが抱かれたときに感じる感覚」	「母子に対するイメージ」
「絵の中の母子の感覚」	
家族関係に関する語り	描き手の感想
「家族への思い」	「絵を眺めてみての気づき」
「理想の家族像」	「過去の出来事についての現在の感想」
「家族への愛着」	「絵を描いてみての感想」
母子画の母子への同一化	
「お迎えの過程で母親が感じたこと」	
「子どもの気持ち」	
「母親の立場にたったの想像」	

画の母子への同一化』に関しては、「お迎えの過程で母親が感じたこと」、「子どもの気持ち」、「母親の立場にたったの想像」など、描かれた母子のどちらか、もしくは両方に描き手が同一化し、気持ちや感情を述べている語りが含まれているものとした。『母子関係に関連したイメージ』は、「浮かんだ母子についてのイメージ」、「母子に対するイメージ」など、母子関係に関連したイメージについての語りが含まれるものとした。『描き手の感想』は、「絵を眺めてみての気づき」、「過去の出来事についての現在の感想」、「絵を描いてみての感想」など、母子画を客観的に眺めて浮かんできた感情や気づきの語りを含むものとした。

評定項目「16. その他（母子関係を含まない）」で得られた評定者の自由記述内容をまとめた (Table 4)。『描き手のイメージ』は、「絵からわくイメージ」、「散歩のイメージ」、「ポジティブなイメージ」など、母子関係に関連しておらず、かつ母子画を眺めて浮かんできたイメージについて語られているものを含むものとした。『描き手の気持ち・気づき』は、「自分の価値観に関する気づき」、「ポジティブ・ネガティブな感情」など、母子関係に直接関係していない、描き手の気づきや感情について語られているものとした。『母子以外の家族成員に関する語り』は、「父親に対する感情」、「兄弟間の関係性」など、母子関係に直接関連しておらず、かつ母子関係以外の家族成員に関する語りが含まれているものとした。『描き手の過去に関する語り』は、「描き手の過去に対する語り」、「描き手の過去に対するネガティブな感想」など、母子関係を含まない内容で、描き手の過去に関する語りが含まれているものとした。『描画の説明』は、「絵の設定」、「絵の中の様子」、「休日の過ごし方」など、母子画に描かれている状況を説明している語りを含むものとした。『母子画の印象』は、「客観的に絵を見たときに感じた印象」や「描き手の主観」など、母子画を見た際に描き手が客観的に感じた印象についての語りを含むものとした。『その他の語り』は、「絵のテーマや絵を通して描きたかったことについて」、「将来の不安」、「自分の現在の心境と絡めた語り」など、グループとしてまとめられなかった語りとした。

Table 4

評定項目「16. その他（母子関係を含まない）」で得られた自由記述

描き手のイメージ

- 「絵からわくイメージ」
- 「散歩のイメージ」
- 「ポジティブなイメージ」

描き手の気持ち・気づき

- 「自分の価値観に関する気づき」
- 「ポジティブ・ネガティブな感情」

母子以外の家族成員に関する語り

- 「父親に対する感情」
- 「兄弟間の関係性」

描き手の過去に関する語り

- 「描き手の過去に対する語り」
- 「描き手の過去に対するネガティブな感想」

描画の説明

- 「絵の設定」
- 「絵の中の様子」
- 「休日の過ごし方」

母子画の印象

- 「客観的に絵を見たときに感じた印象」
- 「描き手の主観」

その他の語り

- 「絵のテーマや絵を通して描きたかったことについて」
- 「将来の不安」
- 「自分の現在の心境と絡めた語り」

考 察

母子画の描画体験に関して

本研究の目的は、母子画を描く過程でどのような体験が得られるのかという点について検討することであった。そこで、PAC分析で得られた語りの内容を評定項目に基づいて分類させ、各評定項目の選択率を算出した。その結果、すべての評定項目が複数回以上使用されていた。よって、本研究で筆者らが生成した評定項目は、母子画に関する語りを分類する評定項目としてある程度の妥当性を有していると考えられる。

評定項目の選択率の高さから、母子画に関する語りとして得られやすいのは、「理想の母子関係」、

「思い出」、「母親への思い」、「子どもへの思い」、「ポジティブな母子の関係性」、「その他 (母子関係を含む)」、「その他 (母子関係を含まない)」であることが明らかになった。なかでも「ポジティブな母子の関係性」がもっとも多く、母子画の典型例は、母子のポジティブな関係性を描いたものであるという馬場 (2005) の指摘と一致する。本研究の参加者も馬場 (2005) と同様に、一般の大学生であったため、母子関係に大きな葛藤がなく、ポジティブな母子イメージを有している者が多かったと推察される。

次に多く得られた語りは、「思い出」であった。描画法はアセスメントの手段として使用されるほかに、治療の一環として実施され、描かれた内容を媒介として、心理面接を進めていくこともある (金沢, 2013)。本研究では、『小さいころと一緒に料理を作った様子』や『スーパーからの帰り道』など、描き手の実際の出来事を元にした思い出が多く語られたことから、面接の中で母子画を用いることで、描き手の過去の母子関係について扱っていくためのきっかけが得られる可能性が示唆された。また、参加者の中には、実際の思い出を想起して、『描き終わってみると自分の母親ではない気がする』など、違和感を述べる者もいた (Figure 3)。このことに関連し、近藤 (2012) は、描き手が描画を改めて眺め、振り返る中で、『現実的じゃない』と驚き、自我違和のともなう反応をすることもあったと述べている。そして、その違和感は『なぜこれを描いたのか』という疑問に変わり、描画の変化を探る動機につながっていた。高松・喜田・石田 (2013) でも、母子画において意識的な母子関係のとらえ方と意識していない母子関係のとらえ方の差異がある可能性が示唆されている。母子画には内的な母子関係が投射されやすいことから、こうした違和感は意識的に認識している母子イメージと、描き手があまり意識していない部分の母子イメージとの差異を表している可能性がある。描き手が母子画を眺めた際に生じる違和感は、自身の母子関係について改めて吟味するきっかけを与えるため、心理療法の促進につながる可能性がある。



Figure 3. 「思い出」の母子画例 (違和感あり)

「思い出」の次に多く得られたのは、「母親への思い」、「子どもへの思い」、「理想の母子関係」といった語りであった。この点は、藤井 (2010) の研究結果と一致している。「母親への思い」では、『お母さんといられて楽しい』、『お母さんと一緒にいたい』という子どもの気持ちについて多く語られ、「子どもへの思い」には『子どもが大きくなったんだなあという気持ち』、『可愛い』といった子どもに対する母親の気持ちが多く語られた。母子画を描く際、描き手は母親か子どものどちらかに同一化することが指摘されており (Gillespie, 1994)、本研究でもこの母子画を介しての「同一化」という体験が確認されたと考えられる。

「理想の母子関係」に関しては、『自分が母親になったらこうなりたい』というような、自身の将来の展望・希望に関係する内容の語りと、『理想的すぎるかもしれないが、こういう母親がいてほしい』といった、自身の願望が込められた語りに分かれた。藤井 (2010) では、前者のようなタイプが見いだされたが、後者のようなタイプは本研究で新たに得られた知見である。後者の場合、描き手の実際の母子関係、あるいはそのイメージは、理想とは異なっている可能性がある。Gillespie (1994) は、虐待を受けている子どもが温かい母子の絵を描くなど、現実を否認する母子画を描くこともあると指摘している。本研究の参加者も、理想の母子イメージを描くことで現実を否認した母子画を描いたが、後で眺めることによって違和感を抱いた可能性がある。

「現在の母子関係」、「現在の母子関係に関する気づき」、「変化」といった、描き手の現在の母子関係に関する語りは、過去の母子関係に関する語りよりも少なかった。このことに関連し、年齢を重ねるほど、母子画に描かれる母子像は描き手の現実から離れる傾向にあり、特に青年期以降は内的体験と現実の大きな格差が存在することが指摘されている (松下・石川, 1999)。また、馬場 (2005) や藤井 (2010)、成田 (2010) などの研究では、母親と幼い子どもに関するものが描かれることが多かった点を考えると、母子画で生じる一般的な大学生の母子イメージは母親と幼い子どもであると考えられる。母親と幼い子どもという内的イメージが母子画に投射されやすかったために、現在の母子関係に関する語りは少なくなったと考えられる。しかし、本研究の参加者は、親からの心理的離乳が進む大学生という時期であり、親からの精神的な自立が「現在の母子関係」という形で母子画に描かれた可能性がある。

一方、「現在の母子関係に関する気づき」の語りは、『自分も年齢を重ね、母親とも大人同士の関係性になった。子どもだったころは受け入れられなかったことも、今はできるようになった』という内容が多かった (Figure 4)。これは、現在の母子関係を描くことをきっかけに、自身や母子関係のポジティブな「変化」に関する気づきが得られやすいものと考えられる。やまだ (1996) は、「入れ子としての母」という題で母と子の絵を描かせると、幼いころの関係性を想起した絵は母親の腕の中に自身を置くことが多いが、青年期の関係性は「入れ子」である母の中から離れて、母子が対等である「並び立つ」関係性が多く見られたと述べている。本研究の参加者も、密着した関係性からやや距離を置いた関係性に移行した青年期にあるため、母子関係に関する気づきが得られた可能性がある。

一方、「とらわれ」、「対立葛藤」、「拒絶」、「理想化」、「母子のネガティブな関係性」といったネガティブな内容の語りも少数得られた。健常者の母子画はポジティブな母子関係が描かれる

ことが多いということは既に述べたが、ネガティブな母子関係も少数みられることが指摘されている (馬場, 2005)。心理面接で外傷体験について洞察を深めたり、肯定的な側面を見出したりすることを心がければ、体験について開示することによって心身の健康が促進されることが指摘されている (谷口・福岡, 2006)。本研究でも、「拒絶」の例を語った参加者 (Figure 2) は、『この絵は母親が子どもを無視している絵』と述べたあと、『描いた時はさみしく、悲しい気持ちであったけれど、今こうして眺めていると、私がこの母子の架橋になってあげたい』と続けていた。これは、ネガティブな母子関係を描くことで気持ちの整理がなされ、その後改めて描画を眺めることにより、前向きな語りが得られたと考えられる。この参加者の描画体験においては、母子画を描くことが内省を深める効果を持ち、さらに描画後に描画体験を振り返って語ることによってそれが促進されたと考えられる。



Figure 4. 「現在の母子関係に関する気づき」の母子画例

自由記述から読みとれる母子画の描画体験

評定項目「15. その他 (母子関係を含む)」を分類した結果、『母子の感覚』、『家族関係に関する語り』、『母子画の母子への同一化』、『母子関係に関連したイメージ』、『描き手の感想』が得られた。「母子に関連したイメージ」や「描き手の感想」は、藤井 (2010) などの先行研究とも一致しており、母子画を実施した際には得られやすい内容であると考えられる。そこで、本研究で得られた新たな視点である『母子の感覚』、『家族関係に関する語り』、『母子画の母子への同一化』について考察する。

『母子の感覚』に関連して、Winnicott (1987) は「抱える環境」を重視し、母親が赤ちゃんを抱える際に、赤ちゃんは母親の息遣いや腕の強さ、体温を感じており、そうした母親の腕や体によって表象されるものが赤ちゃんにとっての世界であると述べている。本研究でも「母子の感覚」を語った参加者は、「赤ちゃんがお母さんに抱かれているときの感覚」について述べていた。ここでは、「抱えられる環境」(Winnicott, 1987) における赤ちゃんの感覚が表現され、柔らかく包み込むような「内在化された母子像」(Gillespie, 1994) が母子画に投射されたと考えられる (Figure 5)。

『家族関係に関する語り』では、母子関係を含めた家族関係についての語りがみられた。これは PAC 分析の手順の中に自由連想段階が含まれるため、母子関係から連想して家族の様子も想起されやすかったことが関係していると思われる。個人の悩みや問題はその人を取り巻く人間関係の影響を少なからず受けており、特に家族関係は性格、価値観、感情、行動など、個人のあらゆる面に影響を及ぼしている (原田・石田・内海, 2009)。よって、母子画から母子関係のみではなく家族関係の語りも得られることで、個人のパーソナリティについてより深く知るためのきっかけが得られる可能性がある。

『母子画の母子への同一化』では、前述したように、描かれた母子のどちらか、あるいは母子両方に同一化する参加者が多かった。大学生のなかでも、女性は母子画の母親像に同一化しやすく、男性は子ども像に同一化しやすい (松下・石川, 1999) ことが指摘されているが、藤井 (2010) をはじめとした、母子画を面接法を用いて検討している研究において「同一化」はあまり見いだされなかった。そのため、本研究では「同一化」を評定項目に含まずに調査を行ったが、「母子画の母子への同一化」に関連する語りが多く得られる結果となった。これは、本研究において、自由連想段階を含む PAC 分析を用いたために、内省が促進されやすかったことが関係していると考えられる。

評定項目「16. その他 (母子関係を含まない)」では、『描き手のイメージ』、『描き手の気持ち・気づき』、『母子以外の家族成員に関する語り』、『描き手の過去に関する語り』、『描画の説明』、『母子画の印象』、『その他の語り』が得られており、母子画を実施することで、母子関係のみではなく、描き手の様々な側面についてアセスメントできることが示唆された。「描き手のイメージ」、「描き手の気持ち・気づき」、「母子画の印象」、「母子画の説明」に関しては、PAC 分析の手順中の自由連想段階で母子画を眺めながらイメージや言葉を連想するため、得られやすい語りの内容であったと考えられる。PAC 分析は PDD と同様に効果があることが示唆された。また、PDD を効果的に行うためには習熟が必要であるが、PAC 分析は手順が定まっているため比較的簡便に実施が可能であると考えられる。



Figure 5. 『母子の感覚』 母子画の例

母子画は幼少期の母子関係が投射されることが多い (Gillespie, 1994)。よって、『描き手の過去に関する語り』では、過去の母子関係が想起された際、母子関係とは直接関係がないが、描き手の過去に関する話題が連想的に喚起された可能性がある。

本研究の成果と今後の展望

本研究の成果としては、母子画から得られる語りを系統的に分類し、描画体験を明らかにすることができた点が挙げられる。また、母子画を描いた後、それについて語ることで、内的な母子関係 (Gillespie, 1994) に関する情報だけではなく、実際の母子関係や家族関係のとらえ方など、さまざまな情報が得られることがわかった。このように、母子画では、広く家族関係についての理解が深まる可能性を持つことが示唆された点も本研究の成果であり、母子画を心理臨床場面で活用していく際に有用な視点となると考えられる。また、「拒絶」、「とらわれ」、「理想化」など、ネガティブな母子関係に関連する語りをもとに、自己理解が促される可能性があることが示された。

また、本研究では、PAC 分析の手法を取り入れて面接調査を行った。喜田・高松・石田 (2013) では母子画と PDI を実施していたが、そこで得られる内容は、「描かれている母子が何を考えているか」など、PDI で尋ねられた内容に対する回答であることが多かった。しかし、本研究では、母子画に描かれていない描画の背景となる情報や、自らの母子イメージなど、筆者が直接的に尋ねてはいないにもかかわらず、多くの語りが得られた。このことは、描画後の PAC 分析により、自由連想を行ったことで描き手の内省が進み、さらに筆者が自由連想語をグループに分類し描き手に提示することで、描き手自身の漠然とした内省の内容が整理されたためと考えられる。こうした PAC 分析の特性により、先行研究では見いだされなかった語りの内容がみられたと考えられる。よって、心理臨床の場面において母子画を用いる際は、PAC 分析の手法を取り入れて描画後の面接を行うことで、書き手の内省を促進することが可能になると思われる。

本研究の問題点として、「15. その他 (母子関係を含む)」および「16. その他 (母子関係を含まない)」の選択率が多くなったことが挙げられ、本研究で用いた評定項目が、母子画に関する語りを分類するカテゴリーとして不十分であった可能性がある。今後は「母子画の母子への同一化」や「家族関係に関する語り」などを新たに評定項目に加え、母子画の語りについてより詳細に検討していく必要がある。

引用文献

- 青木健次 (1979). 投影描画法研究の動向 京都大学教育学部紀要, **15**, 209-222.
- 馬場史津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Bion, W.R. (1962). 精神分析の方法 I セブン・サーヴァンツ 福本 修 (訳) (1999) 法政大学出版局
- 藤井優子 (2010). 母子画を利用した面接法の検討 山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, **1**, 51-61.
- 藤中隆久 (2008). バウムテストを使用した二つの事例研究 心理臨床学研究, **26**, 184-192.
- 藤中隆久 (2010). バウムテストを利用して自己理解のための体験探索を促進する方法 心理臨床学研究, **28**, 303-312.

- 古川裕之 (2010). 風景構成法作品の振り返り体験 ——PAC 分析による検討—— 日本芸術療法学会誌, **41**, 24-29.
- Gillespie, J. (1989). Objective Relations as Observed in Projective Mother-And-Child Drawings *The Arts in Psychology*, **16**, 163-170.
- Gillespie, J. (1994). *The Projective Use of Mother and Child Drawings*. New York : Brunner / Mazel.
- (松下恵美子・石川 元 (訳) (2001). 母子画の臨床応用 ——対象関係論と自己心理学—— 金剛出版)
- Grolnick, A. S. (1990). *The Work and Play of Winnicott*. Jason Aronson Inc.
- (野仲 猛・渡辺智英夫 (訳) (1999). ウィニコット著作集 別巻 2 ウィニコット入門 岩崎学術出版社)
- 原田雪子・石田 弓・内海千種 (2009). 心理面接における動的家族画・家族イメージ法の活用——課題の非構造的・半構造的特徴に注目して—— 徳島大学総合科学部人間科学研究, **17**, 23-41.
- 伊集院清一 (2009). 絵画療法の精神療法としての治療可能性 日本芸術療法学会誌, **40**, 7-23.
- 金沢 晃 (2013). 言語的なやりとりが困難な青年期男子との自由画を介したスクールカウンセリング過程 臨床描画研究, **28**, 130-146.
- 川上範夫 (2014). ウィニコットがひらく豊かな心理臨床——ほどよい関係性に基づく実践体験論 明石書店
- 近由美子 (2010). 親の養育態度が子どもの人格形成に及ぼす影響についての研究——動的家族画による—— 神戸大学人文学会人間文化, **28**, 123-129.
- 近藤孝司 (2012). 描き手が自身の描画を振り返ることの心理臨床的意義 約 2 年, 4 枚の S-HTPP 法を用いた二つの事例研究, 心理臨床学研究, **30**, 309-319.
- 久保 恵 (2000). 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像—— 内的ワーキングモデルの観点からの検討—— 教育心理学研究, **48**, 182-191.
- 松下恵美子・石川 元 (1999). 母性意識と母子画に描かれた対人表現との関連について 臨床描画研究, **11**, 43-55.
- 内藤哲雄 (2002). PAC 分析実施法入門 個を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 成田小百合 (2010). 保育学生による母子画の標準タイプ——保育者志望動機との関連—— 新島学園短期大学紀要, **30**, 35-45.
- 名島潤滋・杉本沙由理・金子恵理 (2004). 心理アセスメントにおける描画法概観(1) 山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要, **17**, 167-182.
- 小川俊樹・Chris, P. (1992). わが国における臨床心理検査の現状とその日米比較 筑波大学心理学研究, **14**, 151-158.
- Prior, V. & Glaser, D. (2006). *UNDERSTANDING ATTACHMENT AND ATTACHMENT DISORDERS : Theory, Evidence and Practice*, Jessica Kingsley Publishers.
- (加藤和生 (監訳) (2008). 愛着と愛着障害 理論と証拠に基づいた理解・臨床・介入のためのガ

- イドブック 第12章 愛着障害の2つのバージョン 北大路書房, pp.194-199.)
- 谷口弘一・福岡欣治 (2006). 対人関係と適応の心理学——ストレス対処の理論と実践—— 北大路書房
- Target, M., Fonagy, P., & Shmueli-Goetz, Y. (2003). 'Attachment representations in school-age children: the development of the Child Attachment Interview (CAI).' *Journal of Child Psychotherapy*, **29**, 171-186.
- 高橋依子 (2007). 描画テストのPDIによるパーソナリティの理解——PDIからPDDへ 臨床描画研究, **22**, 85-98.
- 高橋依子 (2008). 投映法の現在 小川俊樹 (編) 至文堂 pp.164-172.
- 高松優貴・喜田裕子・石田 弓 (2013). 母子関係における質問紙法と描画法にみられる母子関係の特徴のずれに関する実証的検討 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **12**, 77-89.
- やまだようこ (1996). 私をつつむ母なるもの——イメージ画に見る日本文化の心理—— 有斐閣
- Winnicott, D.W. (1987). *Babies and their mothers*. Addition-Wesley Publishing.
- (成田善弘・根本真由美 (訳) (1994). ウィニコット著作集第1巻 赤ん坊と母親 岩崎学術出版社)